



発行日 2000年3月 日 第5号
 発 行 札幌歯科医師会立口腔医療センター
 〒064-0807 札幌市中央区南7条西10丁目
 TEL (011)511-7774 FAX (011)511-1530
<http://sasshi3.pobox.ne.jp>
 E-mail sasshi@tky2.3web.ne.jp
 発行人 小林重行 発行責任者 鶴岡一彦

平成11年度第2回研修会開催される 「自閉症の人たちに対する支援・援助」 -TEACCHプログラムのアイディアを応用して-

平成11年度第2回口腔医療センター研修会が3月4日土曜日午後3時より札幌歯科医師会館において開催されました。講師には、おしまコロニー星が丘寮施設長 寺尾孝士先生をお迎えし、「自閉症の人たちに対する支援・援助」-TEACCHプログラムのアイディアを応用して-という演題でご講演いただきました。



口腔医療センターでは「なんらかのハンディキャップを持つ市民も地域社会の一員として、ひとしく生きることが保証されていなければならない。」という基本的考え方のもとに歯科診療においても地域社会の中で患者自身の選択肢を広げていくことが必要であると考えております。他の医療機関と連携しながら患者の全身的管理や心理的状況を考慮して安全で有効な治療を円滑に進めることが重要となってきますが、それに対応した診療体制は完備しているといえないのが現実です。今回は自閉症の患者についての基礎的知識や安全かつ円滑に歯科治療を進めるための臨床的知識について研鑽を図る目的で講演会を企画しました。

特に今回は公開講座の形をとり、広く市民からの参加を募りました。一般市民からは約165名の参加があり、これに会員、所員をあわせて約195名の出席がありました。富田企画研修部長の司会・進行で石塚口腔医療センター副所長の開会の辞、次に小竹札幌歯科医師会副会長の挨拶に引き続き、講演が始まりました。寺尾先生はおしまコロニー星が丘寮で自閉症の人たちの一生を一貫して支援する包括的プログラム、「TEACCH」のアイディアを実践することにより多くの自閉症の人たちの日常生活、社会生活での自立に取り組み、成果を上げていらっしゃいます。以下は先生のご講演をまとめたものです。

TEACCHプログラムについて

1. TEACCHとは：自閉症とその周辺領域のコミュニケーションにハンディキャップを持つ人たちのための教育と福祉に関する米国ノースカロライナ州政府が試行している行政制度のことです。(Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children)
2. TEACCHの原理：自閉症を中枢神経の障害で一般の人と異なった情報処理の過程を持ち、周囲の世界の理解の仕方が違う、治癒や全快することが困難な生涯にわたる障害ととらえ、包括的で人生全般にわたる一貫性のある支援を行うというものです。そのためには両親との協力関係を重要視し、自閉症の個人とその家族の個別のニーズに対応していきます。
3. TEACCHセンター：ノースカロライナ州には7カ所設置され、診断評価から相談業務、就学相談、法律関係や財政支援や福祉サービスに関する情報など、自閉症とその家族にかかる行政サービスを提供しています。

口腔医療センター通信

4. 構造化について：約30年の実践研究の中で蓄積されてきた「自閉症の人もこのようにすればわかる」「こうすればできる」というノウハウをもとに、将来地域でできるだけ自立して生活できるようにすることが目的です。

構造化は どこで、 いつ、 何を、 どのようなやり方で、 いつまで（どのくらいの量）、 終わったら次に何をするのか、 といった6つの情報を理解することを助けるもので、 次のような種類があります。

- ・物理的構造化：場所と活動の意味を一致させる
- ・スケジュール：いつ、 どこへ行けばよいのかが分かる
- ・ワークシステム：どれだけの量をするのか、 何をやるのか、 いつ終わるのか、 終わったら次に何をするのかが分かる
- ・ルーティン：決まった手順や習慣のことで、 次に何をすればよいのかが分かる
- ・視覚的構造化：見ただけでも分かる



II 星が丘寮の概要

日本でTEACHプログラムを実施しているところはありませんが、寺尾先生は星が丘寮でこのプログラムの構造化のアイディアを応用することにより自閉症人の身辺的、社会的自立を支援し成果を上げていらっしゃいます。寮の定員は60名で現在の利用者は自閉症59名、肢体不自由1名です（男性48名、女性12名）。利用者は作業班、実習班のどちらか、あるいはその両方に属しています。作業班は寮内にある作業所で空き缶選別、製函などの作業を行い、実習班は外出してレストランや宿泊施設などの職場で働いています。多くの場合、職員の支援、援助が必要ですが中には一人で通勤し実習を続けている人もいます。

寺尾先生のお話に引き込まれる受講者の方々

III 取り組みの実際

1.評価・観察

評価：日常生活、社会生活、作業と実習など様々な場面での行動内容を分析、評価するもので評価の段階は『合格』『不合格』『芽生え』となっています。ここでいう『芽生え』は完全にはできないが少し手助けがあればできるとか、モデルなどの何らかの手がかりを示せば可能といった状態を指し、重要視されています。

観察：個人個人の状態を確実に把握するため、様々な場面で何に興味を示すのか、何が得意で何が不得意か、何かを伝える時にどのような配慮が必要か、何に不安や混乱を示すのかといったようなことを観察します。実際に指導や支援・援助を行うときはこの評価と観察を組み合わせて実施し、何を教え、どのように環境を配慮すればよいのかを決定しています。一人ひとりに合った個別プログラムを評価と観察を実施していくことで発展させていくようにしています。

2.個別目標の設定

一つの目標を乗り越えることで、自信をつけ物事をやり遂げる楽しさや取り組む態度を身に付いてくるようになるのが目的です。日常の普通の社会的な生活の場に応用して用いることができるものを全体的な目標とし、小さな短期的な目標を積み重ねていくものです。目標の設定にあたっては、その目標となるものが発達レベルに合っているか、実際の生活に応用可能なものか、自立ということに配慮されているか、明確で具体的かということが重要です。

3.日課のスケジュールの提示

『何を』『どこで』『いつ』という情報を彼ら一人ひとりの機能レベルに合わせて理解できるように提示します。活動の量も機能レベルに合わせたものにし、活動の終わりと次に何をするのかも理解できるようにします。例えば絵で理解できる場合は日課を絵で上から下へ提示します。

口腔医療センター通信

4.物理的構造化

場所と活動を一致させその場所がその活動であるということを見ただけで理解できるようにしています。作業場面においても個々の機能レベルに合わせて、机の位置、衝立、座る場所などに配慮を加え、集中して仕事ができるようにしています。

5.ワークシステム

個々の機能レベルに合わせて『何をするのか』『どのくらいの時間ないし量を行うのか』『いつ終了するのか』『終了後何があるのか』を理解できるようにしています。たとえば色、シンボル、文字などと作業をマッチングすることで作業の内容を理解し、その順序を上から下へあるいは左から右へと示す方法があります。

6.視覚的に明確に伝える配慮

言葉による指示がわかりにくい人が多いので絵、写真、文字等を単独、または組み合わせて用いて具体的にそのやり方を示すようにしています。

7.コミュニケーション

理解について：一人ひとりの理解できる力を配慮し、観察・評価結果の情報をもとに、こちらが期待していることを適切に確実に伝わるようにしています。

表現について：彼らのコミュニケーションの力を把握することに努め、すでに習得している自発的なコミュニケーション行動、手がかりがあった場面、自発的なコミュニケーション行動が出やすい場面などの情報をもとに指導するコミュニケーション行動を選択します。

8.その他配慮や工夫をしていること

- ・仕事や課題に取り組んだことができないという結果を招いてしまわないようにしています。その場合、不必要な過剰な援助をするのではなく「できた」という実感をもたせるようにします。
- ・補助具は職業的な課題のみではなく、身辺処理に関する事や余暇場面においても活用するようにしています。
- ・どのように関わっていくかは、個々の状況によって検討し、いったん方法を決めたら関わる人が変わっても同じように進めていくようにしています。
- ・自由時間においても何もしない状態にするのではなく、パズルをしたり、音楽を聴いたりして一人で適切に過ごしていくための技能を身につけることができるようになっています。
- ・新しいことを教える時には一つの内容のみとするようにしています。
- ・生活、作業やレジャーの各場面でその場面に応じた適切な行動を一人ひとりの機能レベル、得意や不得意といったことを配慮し身につけることができるようになっています。

IV ビデオ供覧

講義の後、生活場面、作業場面、実習場面を撮影したビデオ上映がありました。生活場面では寮で自分で歯を磨いたり、ふとんをしいたり、カセットを聞いたりする様子が撮影されておりました。作業場面では机に向かって箱を作っている様子、実習場面では一人で職場まで出かけ、多くの人に混じって仕事をする様子が撮影されていました。いずれの場面でも他人から命令されることなく自分で手順通り仕事をこなし、その表情はいきいきとして自信さえも伺い知れ、一般の人々が自閉症に対して持っているイメージはまったくありませんでした。

V 結び：最後に結びとして寺尾先生は次のようにおっしゃいました。

多くの自閉症の人々の場合、身辺面でも作業面でもできないことが多い。しかし成人期になったなら生産活動に携わって欲しいし、いろいろなことができるという実感も味わって欲しい。そして1つでも2つでもできることがあればいろいろなことにチャレンジしていくのではないかと思って努力してきた。入寮したとき彼らの身辺面のできなさや行動面の問題があったとしてもいろいろなことが学習でき、先程のように構造化して情報を示せば、つまり何を、どのように、どのくらいの量で、どのくらいまでといった情報がきっちり伝われば彼らはいろいろなことができる。彼らはできる人たちなのだ。自閉症だからといって問題行動だらけの人たちではない。ただ適切に学習させてこなかったり、彼らの能力を越えることを要求しつづけたりして失敗経験の連続のような環境に育ってくればこじれてしまう。物事の感じ方、とらえ方、解決の仕方など私たちとはいっぱい異なることがあるが、やれること、楽しむことは私たちと変わらない。ビデオには写ってなかったが実習の後温泉に入り、カラオケをし、寿司屋に行ったりしている。これらのことと配慮すれば彼らの生活はどんどん拡がる。私たちも彼らの身辺面に配慮し、コミュニケーション・マインドを養っていれば彼らもハッピーな人生を送れると実

口腔医療センター通信

感する。

多くの人々は残念ながら行動障害を持って入寮してくるが決してそれが彼らの本当の姿ではない。ちゃんと人に命令されずいきいきと働く、自分の楽しみがつくれる。それが行動障害を示さざるを得なくなってしまう。彼らに関わる人々の責任を痛感せずにいられない。無知は罪である。「知らない」ということでどれだけ彼らを苦しめてきたことか。私たちは生物学的生命を奪ってこなかったが無知なことによって心の生命は奪ってきたかもしれない。行動障害を示す人たちは苦しいからそのような行動をとってしまう。是非とも勉強してできるだけ早くその苦しみから救ってあげてほしい。

講演からは先生やスタッフの方々そして利用者の方々の並々ならぬ努力や苦労、そして実習に協力して職場を提供してくれる人たちの暖かい理解の心が伝わりました。そしてビデオの中のいきいきと働く自閉症の人たちの姿に感動しました。会場は熱心な雰囲気に包まれ、予定の2時間はとても短く感じられるほどでした。

最後に福富口腔医療センター担当理事の閉会の辞で研修会を終了しました。

(中澤 潤 記)



今回はじめて設置した託児室で、ノビノビ遊ぶ子供たち。

「寺尾孝士先生の講演会に出席して」

村上 宜くんのお母さん 村上 清美さん

私の息子（中二）は自閉症で、昨年の九月から三ヶ月間、おしまコロニーの第二おしま学園でお世話になりました。ビデオで紹介されたすばらしい実践例の一部を実際に見たり、お話を聞く機会にも恵まれました。自宅に戻ってからも指導していただいたことを生活の中に取り入れていますので、T E A C C Hプログラムのアイディアを応用してという寺尾先生のお話が聞けることを楽しみにしていました。不必要的過剰な援助をするのではなく、適切で必要なことのみ援助するようにしている、できるという実感を持たせるとよいと言うお話に、耳が痛くなる思いでした。本人のことを、きちんと理解して適切な支援ができるようにこれからも学んでいきます。

自分自身の力で活動できることが増えていき、生活していくことが楽になるとどんなによいでしょか。

「講演の感想」

佐藤 哲平くんのお母さん 佐藤 恵利子さん

全国で活躍されている寺尾先生のお話は、以前から聞きたいと思っていましたので、今回は楽しみに参加させていただきました。実践に裏付けられた先生のお話は説得力があり、親を含めた自閉症の人を援助する人達は無知であってはいけない、問題を障害のせいにするのではなく、かれらの障害特性と機能レベルと個性を理解して適切に援助できない自分たちの問題としてとらえるべきだ、と叱咤激励される思いでした。私は親の立場ですが、身近過ぎるがゆえに子どもを分かったつもりになっている危うさがあると思っています。常に成長し変化し続ける物言わぬ子どもが、どうしたら自分の回りの情報をうまく理解・判断し、より快適に暮らせるか、そのことを考えるヒントをたくさんいただけたと思っています。

市民公開講座を企画してくださった歯科医師会に感謝します。

障害者診療部のドクター紹介



山口 令 先生

センター担当医となり、貴重な体験をすることができました。



牧野 秀樹 先生

気はやさしくて?力持ち。
ヒゲがトレードマークです。



北村 完二 先生

これからも患者の皆様のために頑張ってまいります。



松崎 弘明 先生

ハスキーボイスな私です。



渡辺 浩史 先生

1~3月土曜日の二診室担当医です。
また毎月1回摂食指導も担当しています。



戸倉 聰 先生

月に1度、摂食指導を行っています。
食べることでお困りの方、是非どうぞ。



摂食・嚥下リハビリテーションのご案内

口から食べたものを、こぼす・よくむせる・噛んでいない等、「うまく食べさせられない」ということでお困りの方。

口腔医療センターでは、わかりやすい指導・訓練をおこなっております。

治療対象 脳性麻痺・精神運動遅滞等の発達障害児・脳卒中後遺症・口腔腫瘍切除術後遺症
などによる摂食・嚥下機能障害をお持ちの方

診療日 土曜日 午後

※ 治療対象、診療日などお気軽にご相談下さい。

お問い合わせ先

障害者歯科診療部



(011)512-9497

投稿コーナー

あきちゃんの動物園

あきちゃん(苅谷 昭吉君)は折紙の達人!!
作品ひとつひとつにあきちゃんのやさしさが詰まっています。
よく見るとウサギやパンダの表情にも気持ちがあらわれて
いるでしょ



皆様からのご投稿をお待ちしております。

イラスト、写真、センターへのご意見、スタッフへのお手紙など、何でも結構です。
どしどしお寄せください。

救急診療部からのお知らせ

夜間の歯の痛みなど、救急処置を目的としています。
継続的な治療は受けられません。
ご注意下さい。



診療時間 午後7時～午後11時
電話番号 (011) 511-7774

※ 必ず保険証をご持参下さい。



障害者診療部からのお知らせ

● 診療のごあんない ●
診療時間
火～金曜日 午後 2時～午後 5時
土曜日 午前 10時～午後 1時
午後 2時～午後 5時
電話番号 (011) 512-9497
休 診 月曜日・日曜日・祝日・年末年始
※ 障害者診療は完全予約制となっております。
診療ご希望の方は、下記の時間帯にお電話にてご予約ください。
火～金曜日 午前9時30分～正午

編集後記

「ぱるす」を発刊して、皆様と紙面を通じていろいろと接してきました
我々編集委員の任期が、三月いっぱいで終了致します。
発刊した当初から皆様のお力添えを頂き、多岐に渡ってここまで成長する
ことができました。心から厚く御礼申し上げます。

四月からは、新しい編集委員で発刊されますが、愈々のご声援をお願い
申しあげ、任期最後の編集後記とさせて頂きます。

編集委員長 富田 達洋